

【症例ペニー】〔女兒、年齢：治療開始時 11歳11ヶ月〕

於・St.George's Hospital, Dept.of Child Psychiatry, Clare House  
Blackshaw Road, London. SW17, ENGLAND

・主訴；軽い学校恐怖症 (mildly school phobia)。

腹痛などの心気症的訴えが多い。ヒステリー性の転換発作あり(一時的に何も聞えない見えない)。手足の麻痺症状などで、欠席が続いた。が、来所当時は学校に復帰している。

・家族背景：父親の心身の衰弱が懸念される。抑うつ的でアルコール中毒。これまでも自殺企図あり。母親は小学校の教師。生来不安の強い性格だが、穏やかで共感的。年子の姉ジェニーがいる。

■資料その1：ペニーについてのメモ書き（日付；1976年4月23日）

ペニーは、1976年2月13日以降、毎週規則的にセラピーのセッションに通ってきております。毎回母親に付き添われてまいります。当初から極度に不安が強く、妙に押し黙って感情を押し殺したふうで、とても繊細で傷つきやすい女の子といった印象がありました。どうやらまだまだ彼女は、母親のエプロンの紐を握って離さない幼い子どものようです。

セッション開始後の初めの何週間かの間、これらのセッションをとおして、彼女はわたしがどういう種類の人なのか、この状況はいかなるものなのかを、極めて受け身ながらも、でも内心では一人当て推量に忙しいといった感じておりました。まなざしをわたしの顔にまっすぐに向け、微動だにせず、沈黙したままです。時には不安げに微笑したり、もしくはただ表情のない虚ろなまなざしでジッとわたしを凝視しているといった感じなのです。こんなふうに時を稼ぐことで、やがてペニーは徐々に目の前の不慣れでなじみのない光景に慣れていったわけでありませう。セッションを重ねるなかで、ごくごく緩やかにではありましたが、われわれの間にとんでもない怖ろしげなことが起こりはしないかといった内なる恐怖<sup>なだ</sup>を宥めながら、でもどうにか一緒に友好的な交わりを続けてゆけるらしいといったことで自らを安堵させるにいたったもようでありませう。

さて、セッションにおいてペニーが絵を描き始めますと、彼女の居心地の悪さはどこかに吹き飛ばしてしまいます。彼女はかなり満足げに見えます。むしろそれは奇妙にも思えるほどなのですが、殆ど自分の‘仕事’に没頭し、我を忘れていたといったふうなのです。とても注意深く、ゆっくりと、そして着実にセッションの間お絵描きを続行してゆきます。因みに彼女の描く絵は、概してとても単純で、型にはまったものです(図例；1976/04/02)。



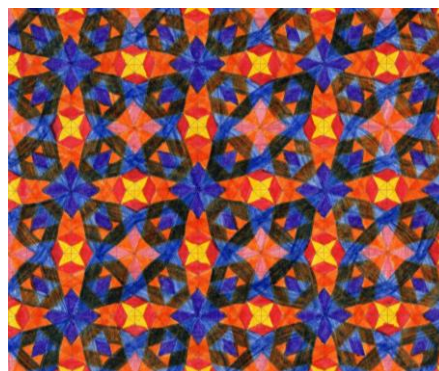
わたしが何か質問をしますと、彼女は自由に返答をいたします。しかし彼女の絵についての連想を求めますと、たとえもし思いついたことがあるとしても極めて限られており、とても表面的なことではありません。わたしは彼女に、絵の中にうかがわれることについて、それが何であるかとか、もしくは、絵を描いている最中彼女の気持ちを占めていた事柄が何かあれば、どんなことでもいい、お話してくれるかしらと尋ねますと、一応その言われている意味は解っているようなのですが、どうも返答が芳しくありません。全体に彼女は抑制が強く、緊張感が高く、想像力が概してひどく平坦です。何とか返答しなくてはと無理に何か言おうとしても、それらは断片的な印象でしかありません。

これまでのセッションの中でどうにか彼女が提示し得た分析資料を概括してみますと、彼女の空想はどうか「分離不安 separation anxiety」に集約されているといえましょう。いつ何時母親が視界の外に消えてしまふとなれば、彼女の身にとんでもない災難が降りかかること(それはおそらく彼女の母親の身に何事かが起こるということでもありましようが)を真底恐れているのです。彼女は迷子になり、外の暗闇のなかに一人ぼっちで置き去りにされるといったこと、為すすべもなく、ひもじさで飢えたままにということです。そうした場合母親は、ある意味、‘ペニーの赤ちゃんの部分’を迷子にさせたことで咎められるべきなのであります。始終彼女を紐で繋いでいなくてはならないのにそうしなかったのですから…。ペニーは、ペットのウサギをお散歩に連れてゆくときには必ず紐を繋ぐことをしているんだそうです！だから彼女のほうがずっと‘真っ当なお母さん’をやれているということになりましょう。

こうしたペニーが母親から離れられずにいる、その不安感の背景には、母親が父親との間にもう一人‘赤ちゃんを産む’ことのないように警戒の眼を怠らないといったことが潜在しているらしく思われます。彼女は、日頃自宅で実際にトビネズミやらウサギなどの愛玩動物を飼っておりますから、「繁殖」については充分な知識があるわけです。ペニーは、その空想レベルで、母親が‘父親ペニス’を所有し、次々と赤ちゃんを産むことができることに苛烈に羨望を向けているものと考えられます。そして、それら生まれてきたものたちを断固として片っ端から亡き者にしてしまわねばならないのです。彼女の嫉妬心及び羨望がゆえにであります。こうした深底に巢食うところの不安感と強迫的な攻撃欲に取り付かれ、息を付くこともままならないわけです。それで絶えず恐怖やら罪悪感で己自身を責め、咎め立てることになります。またそれらの発覚することにも脅えているのです。だからそれらの証拠を隠滅するのに、常に用心を怠らないわけです。彼女の根深い自責の念は「責任能力」につながることは決してありません。「否認 denial」というメカニズムが支配的です。どちらかという、そうした赤ちゃんっぽいことをあれこれ取り沙汰することを侮蔑しており、<わたしは大きいんだから…(I am a Big Girl!)>的な‘尊大さ’が優勢とみていいでしょう。ですから、彼女は心のドアに鍵を掛けたままといったふうで、精一杯防衛しているわけですから、飽くまでも<わたしが感じることなど何もごさいません>といったことに終始するのです。例えば母親の車の事故についてもそうです。それもセッション直前の30分ほど前に起きたことだったので、何ら言及されることはありませんでしたし。また彼女が北ウエールズ地方に友人の家族と一緒に旅行する予定についてもそうです。一週間も彼女は家を留守にすることなどかつてあった例はないのですから、どんなに心細いでしょうに…。或いは、母親の心配事だって、十分に察し

ているはずなのに。一切触れることはありません。例えば、父親は自己破壊的で自殺未遂を重ねていたのですし、また近いうちに何かやらかすのではないかと気が気でないのです。それを彼女は知らなくはないはず。それから、彼女のお気に入りのトビネズミが最近死んだことについてもそうです。でも、どうしてもそれらをここで Miss Yamagami に打ち明けるといったことにはまるで思い至らないのです。また姉ジェニーについての言及も何らありません。学校の成績からして、ジェニーはどちらかというと凡庸であり、ペニーの方が目だって優秀という事実があり、従ってこの姉妹間に何らかの葛藤やら摩擦があるものと予想されるのですが、まるで一人っ子みたいなのです。よく考えますと一人っ子なのはペニーに限らず、ジェニーも、そして彼女らの父親も母親の‘一人っ子’であるということになりそうです。互いに競って母親の注意を奪い合っているというわけです。

ペニーは、わたしがこうかしらああかしらといろいろ語りかけることには、それが何であれ、とても注意を払って聞いているようなのです。でも神妙な面持ちながらも、いつも最後にただくわたし、ほんと解らないです・・>というだけなのです。とても頼りなげに・・。それはいかにも意図的に彼女自身の感情を、心の痛苦を、殊に心悩ますところのどんな嘆きをもわたしにそっくり預けてしまっているといったふうなのです。それも大きな制限付きといえましょうけれど。こうした意味で、先日復活祭の休暇の前に彼女が描いた絵(図例; 1976/04/09)はとても印象に残りました。それは‘パターン’であります。構図上とてもうまく出来ており、綺麗な色で塗られております。そして、彼女の感情とはいえば、文字通りその窮屈で頑迷な構図化されたパターンのなかに完全に埋もれてしまい、跡形もないといったふうなものでした。感じたこと思ったこと、どんな心の動きもさっさと‘片付ける’ことは彼女にとってお手の物といったことです。無かったことにすればいいわけですから。それに「用がないひとには用がない」で済ませられるわけです。だからわたしが休暇中に不在であることには一切頓着しないといったことにもなります。泣き喚いてもどうしようもないとしたら、どうしようもないでしょうし。「聞き分けのいい子」をやっているだけ。そんな自分にペニーは納得しているかのようであります。「自己懷疑」には縁遠いといえましょう。心的葛藤といった厄介なものはすべて排除・排出すべきものであり、それで折々に心気症的に自分が何かしら問題を抱えていることを露呈するばかりで、だからいつもどこか‘虚ろ’で所在無い印象なのです。この少女ペニーは、そんなふうは無自覚的であり、どうやら何の不安も覚えなないみたいなのです。それで日常生活には何の支障もないようですし、そして学校の成績は至って優秀なのですから。わたしは、今後こうした彼女の治療のプロセスにおいて実際にどのような進展があるものやらとても興味を抱いております。そして、いつか彼女が己自身についてより統合された自覚を抱くことがありますかどうか、一緒に見てまいりましょうと考えております。



Chizuko Yamagami  
Child Psychotherapist

\*\*\*\*\*

## ■資料その2:ペニーについてのサイコセラピー経過レポート (日付不明)

ペニーは、セッションに訪れるたびに一枚の絵を描きます。これらの提示された絵から見ますと、近頃の



彼女には著しい変化が窺われます(図例;1976/06/18, 1976/12/29)。理解力、取り入れ能力やら外在化といった心のメカニズムも目だって拡がりが出てまいりましたし。。

それから、それら絵の内容が豊かになった



ともいえます。そこに登場する人物たちが多様化してきました。それらには動きが見られますし、お互い同士関係付けが可能になっているようであります。そしてこれらの絵の中に今や彼女の感情をあれこれ窺い知ることが

いくらか容易になってきたといえます。満足感、喜び、情愛とか、誰かを慈しむことや思いやりといったこと。。それにまた、衝撃やら摩擦、それに否定的な感情も。。例えば嫉妬心とか敵対心とかですが。それらは特に、ここ最近のこと2ヶ月ほどの間に認められる彼女の変化といえましょう。

彼女は、本当に自分というものの感情とか考えといったことを持つことには極めて限定されているように見受けられます。セッションにおいて、彼女の態度というのは、わたしをもう一人の別の‘人格 person’として求めようとしたりすることはありませんし、そうした接触は望めません。彼女がどう感じるかとか何を考えているのかといったことごとく自然に彼女自身の口から自由に何かが語られるといったことはほとんど皆無に近いのです。それもどうやらここに至って、彼女自身の自己なるものをわたしの語る言葉をとおして経験し始めていると言えそうです。わたしの口、耳、そして目、そして頭脳を通して。。わたしの語る言葉は彼女に何らかのインパクトを与えることはないとも言えません。たとえ彼女がそうです(Yes)とかそうではありません(No)とかのごくわずかながらの返答を繰り返すだけだとしても、彼女は自分が私とは違う別個の存在だといったことの自覚を徐々に掴み始めているともいえそうです。



彼女のなかに幾らかでも考えを進めてゆくことが徐々に可能になってきているようであります。しかしながら、セッションのお休みで治療の流れが中断されますと、それが長いものでも短いものでも彼女は必ず後退を余儀なくされます。彼女が描くところの絵は平坦となり、静的(static)で、まるで彼女はこの世すべてに背を向けて、自己愛的、自給自足的な自慰空想の世界に耽溺してしまうようです(図例;1976/03/27)。



彼女の心のなかには「自己」とか「非自己」とかの区別は無さそうです。ですから外的現実において生じた何らかの災難は（例えば、彼女の両親の身に降りかかった事故とか、家族間での諍い）は、彼女が自分自身についてその内側に於いて経験していることがら、からだの感覚そして感情 feelings といったものの反映としか見做され得ないのであります。特に生理のときなどがそのようです。

彼女の空想生活において、彼女の両親は病気で、損傷を負っているか、或いは破壊的で、ひどく焦れて、怒り狂っている赤ん坊であると見做されていると思われます。だから、ペニーとしては是が非でもそうした彼らを‘矯正’しなくてはならないといったことになります。彼女の内側の‘病気の子どもの両親’に対して、彼女は強烈な侮蔑、憤り、そして徒労感を伴いながらも、優越感に満ちたところの母親といった態度を誇示します。だから新しい赤ちゃん、新しいお父さん、そして新しいお母さん、すべて完璧で良い、素晴らしく幸せに結ばれた家族というものを、繰り返し心の内で捏造（偽造）してゆくことに没頭せざるを得ないことになっているようです。しかしながらこうした奮闘努力も決して報われることはありません。それは絶えず彼女の家族のなかで不幸な出来事が起こるからです。そこで彼女は苦々しく幻滅を味わうことになります。そして失望落胆し、どんなにしても自分について一人の真っ当な人間（a well-being）という感覚を得ることは望めないと思うのです。

彼女自身が無力で、かつ思い通りにならないので怒り狂わんばかりの赤ん坊なのです。そして彼女は、いつかおのれの暴力的な怒りと攻撃性がコントロールを越えて、そして全世界を、内側もそして外側も、木っ端微塵に粉碎し、崩壊させてしまうのではないかとひどく恐れているわけなのです。

わたしは、これからの彼女にもし何らかの進展があるとすれば、それはセラピイのセッションに於いてはもちろん、外に於いても彼女が抱えられるところの環境が提供されるかどうかによって依るということではないかと考えます。その意味で彼女がセッションに毎週確実に通ってくるのが必須条件でありましょう。

Chizuko Yamagami

\*\*\*\*\*

■資料その3:ペニーの主治医宛の手紙（日付;1977年5月2日）

Dr. H. C. Cameron  
Consultant Child Psychiatrist,  
Dep. of Child Psychiatry,  
St. George's Hospital,  
SW17.

Dear Dr. Cameron,

既にお聞き及びと存じますが、ペニーが最近ヒステリー性転換の発作を頻回に起こしているようです。これはたぶん3月30日以降2週間ほど復活祭休暇のためセラピイのセッションがお休みになったことに関連しているものと考えられます。

まずは、最近のペニーのセッションにおいて彼女がどのような様子かをかいつまんでご報告いたします。それは、言うなれば転移状況に突入したかのようにありまして、‘保育器’のようなお母さんの懐にしっかりと抱かれている赤ちゃんのようであるといえそうです。そして、小児性の万能感的空想に感溺しているといったふうなのです。すなわち、‘胎児なるペニー’がわたしなる母親をその内側から養い育てているといったことであります。またそれ以上に、彼女はわたしの内にある‘父親ペニス’ということにもなりましょう。それでわたしにたくさんの赤ちゃんを与えんとしてひたすら専念しているといった具合です。そうした空想も休暇が近付くにつれ、自ずと幻滅せざるを得ないことになったというわけです。

一見したところのペニーの無表情・無頓着といった仮面の下に、暴力的な憤怒があり、深い落胆を苦々しく味わうことになったものと考えられます。彼女は、その空想のなかで、撮り込んだ‘危険で破壊的で凶暴な父親ペニス’を操作し、かつ巧みに利用するようになっておりました。(これは投影同一視によるものと考えられます。)こうした類いのことは、例えば彼女の「幻視」であります。そこでは「彼女の家族がすべて火のなかに捕らわれ、逃げられずに燃えている」といったことが実際にこの内側で起きているようであります(1977/03/30)。こうした時点では、彼女自身述べておりますように、視覚も聴覚も一時的に遮断されるもようであります。彼女が、自らの破壊性によってもたらされたと思われる結果を恐れるあまり、焦慮と無力感でどれほど苦悶していたかということは、わたしとしては十分に理解するところです。

それで、おそらく彼女はすべて身体的な感覚、そして情緒的な知覚をも彼女の意識から切り離そうとする必要があったといえましょう。確かに、最近ペニーの心の内で何らかの‘気づき’が芽生え始めているのは確かです。そうしたことからわたしといたしましては、今後彼女との治療同盟が徐々に強化されてゆくことが期待できるのではなかろうかと考えます。しかしながら、ペニーの治療が成功裏に継続されますかどうかは、彼女の自我力と心的痛苦に耐えられる能力におおきく依るものと思われれます。それも、父親を排斥せんとするエディプスの葛藤の解消、並びに母親との関係性に於いて固着されていると見做される、‘同性愛的な結託’を超克するといったプロセスをとおしてという具合に考えられます。それは、おそらく甚大な壁といえましょう。

事実4月20日&27日と連続してペニーは喉<sup>のど</sup>の痛みを理由にセッションをキャンセルしております。今後の治療継続が些か危ぶまれます。そちらで近々彼女との面談を予定されている由、うかがっております。今後のことなど、ご相談申し上げたくいづれよろしくお願い申し上げます。

草々

Chizuko Yamagami

c.c. Mrs. Helen Braverman

\*\*\*\*\*

## ■ 後記

ペニーは主治医のDr. Cameronとの面談(1977/05/05)を終えた後、進級試験のためという理由でわたしとのセラピーの中断を希望した。最終セッションは5月25日で、この間ペニーと下記のような語らいがあったことを概略的にここに記しておこう。

くもはや悩んでいることはない・・・すべてうまく行っている。私は良くなった。学校も楽しいし・・・新しい友だちも出来たし・・・>、と彼女は語った。<ここで先生はこれまでわたしのためになることをしてくれたと思う。でもこれから先は、もはや何かしてもらおうことはないと思う。それは唯一Mrs. Freestoneじゃないかと思う。彼女なら助けになってくれそう・・・家族のこととか・・・>。すなわち、彼女の要旨は明快だ。自分はもはや問題ではない、むしろ家族、特に父親が問題なのだ。そうだとしたら、これまでずっと家族の面倒をみてくれたPSWのMrs. Freestoneがいればいいということになる。そこでわたしは彼女に語った。ここであなたの不安やら悩みを取り去るお手伝いをしてきたわけではない。ただ彼女の感じるころのものやらころの裏側でどんなことが動いているかを理解しようとしてきたわけで。もしこれから続けるとしたら、それもどんどん難しくなるかもしれないわね。それでももっと自分が解るってことだけ・・・。そうした理解をペニーが可能ならば活用し、自分のお世話を自分でもっとできるようになるということが期待されるんだけどね・・・と。これに対しペニーは、<でも、わたしはむしろそうしたいと思わないわ>ときっぱりと返答する。<自分を理解するという努力には終わりはないのよね>と示唆すると、<でも自分自身について何も知らないとしても全然かまわないと、わたし思うわ>と彼女。<自分について何らかの真実を知ることというのは大事でないかしら>と言うと、<どうしてひとはそれをしなくてはならないのかしら・・・>と、彼女異議を唱える。<どうしてかしらね？>と、わたしは言葉を返す。

ここで彼女のなかの‘hypocrisy(偽善・ねこかぶりな部分)’が優勢になってきていることが見て取れる。今やペニーは13歳2か月である。確かに「成長する」ということがどういうことなのかといった問題が浮上する。おそらく依存感情やら誰かとの一体感の希求、さらには自立心との絡み合いが・・・とりわけ誰かに依存せざるを得ないことの屈辱感が・・・。だがその背後には依存対象への深い憂慮が潜在しているようにうかがわれる。それが果たして自らの貪欲さに耐えられるだけのレジリアンスを有するものか否か絶えず疑心暗鬼なのだ。依存対象を消耗させてしまうことの怖れ。だから貰えないというか、貰わないで済ませようとする彼女がいる。侮蔑されることこそ彼女にとって痛手なのだ。疎まれたり毛嫌いされたり爪弾きされることは耐えられないわけで。そしてとことん依存対象にうんざりされる前にあっさり自ら身を引いて消えていなくなるといったこと・・・。そして最後に残ったのは「お勉強」すること。学習への貪欲さは褒められこそすれ牽制されることはない。学校でのいい成績は彼女の矜持を満たすもの。今やそこに活路を見出した‘野心家’のペニーがいたともいえよう。極めて賢明ともいえようが・・・。

唯一つここで気掛かりなのは、‘ペニーの赤ちゃんの部分’が犠牲にされるということであり、また別の誰かにそうした厄介な赤ちゃんの部分の投影し、侮蔑を向けている限り、自分は安泰だといったことがありはしないかということ。家庭では父親がそうした‘赤ちゃん的存在’であることは間違いないわけで・・・。

そもそもペニーの主訴である学校恐怖症というのは‘母親の子どもたち’への嫉妬心であり、敵愾心であつたらうし、それも今や侮蔑するだけの対象として片づけられるに至つたとなれば、それは或る意味ペニーの成長の証といえなくもない。ようやく‘大きなお姉ちゃん a big-girl’になつたということ。そうであるとしても、その侮蔑が、意図的にしろ無意識的にしろ、‘他者を思い遣る’とは逆の、むしろ‘他者を嘲り、虐げる’<sup>あざけ</sup>といったことを合理化・正当づけされることになりはしないかといった懸念はどうにも払拭し得ない。これを此の家族全体の病理という観点からみれば、父親(もしくは男性一般)をめぐって何やら母親と娘たちの間で繰り返された「反復」ではなからうかとふと思われた。が、その根拠を提示する資料は充分ではない。ペニーの隠された‘驕慢さ arrogance’がこれからの彼女の行く末に於いて一つ懸念として残る。何らかの破綻を予想するのは今はまだ早い、彼女が大きな‘盲点’を引き摺つたまま生きてゆくように思われてならない。



彼女は一枚の絵を描いた(図例; 1977/05/18)。葉っぱの上にかたぴら(毛虫)が一匹ちよこんと乗っていた。<ペニーの中の‘赤ん坊の部分’がとにもかくにも Miss Yamagami の腕に抱き上げられて育ててもらつたということを語っているのかしら…。この間、地べたに放置されることもなしにといった意味かな? >と、わたしが尋ねると、彼女はウウンと否定する。ちょっと意地悪な微笑を浮かべ、こう語つた。<木の枝にはいっぱい葉っぱが付いているわけで、先生はそれらの葉っぱの一枚に過ぎない。このかたぴらはただ歩き去ってゆくところ。通りすがりつてわけ…。なぜというと、葉っぱが消化に悪いものだから…。>と。だから食べる気になんかならないというわけだ。そんなふう<sup>ふう</sup>に毎回のセッションで、ペニーはわたしから貰つたものを押し出してしまふわけなのね、と尋ねると、彼女はそうだと返答する。

‘かたぴらのペニー’は、一つの葉っぱから別の葉っぱへと移るだけなのね。すべてがペニー次第というわけ。それがいいものか悪いものか、味のあるものか味気ないものか…だから要るか要らないか、貰うか貰わないかも、すべて彼女が決めること。でもかたぴらは食欲がないといって栄養を摂取しなければ、やせ衰えてゆくばかり、そしていつか美しいチョウに成長することもできないだろう。今ここで与えられている‘資源’を大いに活かし、生きるための糧を求め、そうでなければ生き残りは難しかろう。おそろく引き続き将来そうしたことをペニーが考えてゆけたらいいと、示唆する。

さらにペニーにわたしは語つた。ここでセッションを通して、これまで幾らかペニーがどんなことを感じどんなことを考えているのかの理解を得られたものと思うが、まだまだたくさんのことが理解されないままに終わろうとしている。それらを彼女はこれからも背負ってゆくことになる。人は自分について真実を解つてゆくことをとおしてのみ心の内に抱える重荷を背負うことができる。もしそれが自分一人では難しいと判断したときは助けを求めていい。自分が困難を抱えているということに気づいたとき、ペニーはまたここに戻ってくることもあろうと示唆して、1年3ヶ月間の彼女との治療は終わった。(2018/01/08 記)